清流

題字：芳野　充

令和4年4月30日
第64号

発行所　加来不動産㈱
発行者　加来　寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

自分の顔に責任をもつ

「四十歳をすぎたら自分の顔に責任をもて」とは、アメリカ合衆国第十六代大統領エイブラハム・リンカーンの言葉です。

彼を補佐する閣僚を選任するにあたり、後任候補としてある人物が推薦されました。推薦人が「その人は大変有能なので、ぜひ」と伝えると、リンカーンは推薦された人と会いましたが、採用しませんでした。後日、推薦人がなぜ彼を採用しなかったかたずねると、「顔がわるい。四十すぎたら自分の顔に責任をもつべきだ」と答えたそうです。

ここでいう「顔がわるい」とは、いわゆる美男子などのカッコいい人ではないから、という意味ではありません。人間、四十歳も過ぎれば、その人の品性や知性、考え方、行動の積みかさねがそっくり顔にあらわれてくる、ということのようです。なるほど、確かにそうかもしれないと、パソコンを打つ手を止め、思わずカガミに自分の顔を映しながら苦笑します。

わたしが二十代半ばのころ、すこし仲よくなった人から「顔がくどい」「顔のクセがつよい」などとよく言われていました。そのころを思い出すと、自分中心の考えや行動がつよく、また様々な情報や人脈をふやそうとガツガツしていた時期です。しかし三十代半ばになると、「さわやかですね」と二十代のころとは真逆のことを言われはじめ、聞きなれない言葉にとまどった時期があったことを思い出します。そのころは社内や家庭でトラブルに見舞われ、自分の未熟さに気づき内面を磨きはじめたころでした。

ここで改めて思うことは、人の心は、良くも悪くも顔や雰囲気にあらわれるものだということです。人を悪く思ったり、ねたんだり、不平不満が多い人はやはり、その表情に何となく陰湿で不満気な雰囲気を感じます。逆に、ささいなことにも感謝し、自分にもまわりにも思いやりを持てる人は、会った瞬間に明るいおだやかな雰囲気を感じ、こちらの気持ちがほどけるような感覚を味わいます。その典型は、赤んぼうではないでしょうか。素直で純真無垢な赤んぼうの雰囲気は人をなごませ、自然とわたしたちを笑顔にしてくれます。

四十も半ばになったわたしの顔をまじまじと眺め、まだまだ感情にムラがあるな、人や仕事などの好き嫌いが強いな、と感じます。日々、内面を磨くために感謝の言葉をおおく口にし、心をおだやかに保つ行動をとり、外面を磨くために柔和な笑顔をカガミのまえで意識しながら、自分の顔に責任がもてる人間になりたいと思います。

加来　寛